北海道医報

ISSN 0913-0217　2026.7.1. 第1294号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価1部275円（税込）

季節風

ＤＥＩＢ

～Diversity, Equity, Inclusion and Belonging

情報広報部　副部長　**寺本　瑞絵**（てらもと　みずえ）

多様性（Diversity）の推進が叫ばれて久しい。その理念に異論は少ないであろうが、どこか建前のように聞こえ、空々しく響くことがある。それはなぜか。おそらく多様性が「違いを認める」ことや数値目標にとどまり、その先の「一人ひとりが大切にされ、必要とされていると感じること」まで届いていないからではないだろうか。近年、Diversity（多様性）、Equity（公平性）、Inclusion（包摂性）に、Belonging（帰属感）を加えたＤＥＩＢという考え方が注目されている。このBelongingという概念に初めて出会ったとき、私は不意を突かれた思いがした。勤務医として、医師会の一員として組織の強化を考える上で、核となる視点だと感じたからだ。

医療界はこれまで、病院や医局に尽くすことを当然とする同質性の高い集団に支えられてきた。長時間労働や急な呼び出しにも応じられる医師を中心に、高い機動力を保ってきた。だが、少子高齢化と働き方改革が進む今、その前提はもはや成立しない。女性医師、シニア医師、地域で奮闘する医師、子育てや介護を担う医師、異なる価値観を持つ若い世代―こうした多様な人材が力を発揮できなければ、医療提供体制そのものが立ち行かなくなる。

Diversityとは多様な人を数として集めることではなく、異なる背景を持つ人々が共に考えることで組織の視野を広げ、新たな解を生む力である。Equityは平等（Equality）と似て非なるものである。全員に同じ機会を与えるのが平等なら、個々の状況に応じた支援で参加の機会を保障するのがEquityだ。時短勤務や復職支援、当直・研修への配慮は特別扱いや優遇ではなく、それぞれが持てる力を発揮できる入口に立つことができるようにする―組織が当然に負うべき責任なのだ。Inclusionは「排除しない」ことではなく、声をかけ、役割を渡し、輪へ迎え入れることだ。発言し、貢献し、存在を認められて初めて、組織は多様性を力に変えられる。

制度や機会が整ったとしても、本人が「ここにいてよい」「必要とされている」と感じられなければ、組織に心から関わることは難しい。この内側の実感こそがBelongingであり、組織への信頼と専門職としての誇りを支える土台となる。自分の働きに意味があると思えるとき、人は単なる労働力ではなく共同体の一員として力を尽くす。逆にその感覚が失われれば、理念も制度も人の心をつなぎとめられない。

この視点は、病院や医師会に所属する意味を問い直す。私たちは給与のためだけに働くのでも、義務で医師会に名を連ねているのでもない。同じ専門職として学び合い、支え合い、地域医療という使命のもとに連帯する。そのような「場」に身を置くことにこそ、組織に属する意義があるのではないか。その実感がなければ、会員減少や若手の参加意欲の低下も避けがたい。声が届き、安心して失敗でき、共に頑張ろうと思える同志がいる―Belongingを育む組織にはそれが要る。若手・女性・地域・非常勤の声を中央に届け、医師が力を活かせる場を広げることは、医師会の基盤を強くする。

そしてこの視点から見ると近年の「直美」問題も違った側面を見せる。専門研修を経ずに美容医療へ進む若手を、個人の倫理観や志の問題として批判するのは容易い。だが、それだけでよいのだろうか。美容医療には明確な役割、報酬があり、勤務時間は予測でき、必要とされている実感が得られる。一方、臨床の現場には過重労働、報われにくい処遇、不透明な将来像、成長を見守られている実感の乏しさが存在することもある。若手が「ここにいたい」と思えるBelongingを、私たちは十分に用意できていたか。

現在、初期臨床研修を終えた医師のうち年間およそ二百人が、専門研修を経ずに美容医療へ進むという。実に、約２大学分の卒業生がこの道を選ぶ計算となる。これは若手だけの問題ではなく、私たちの教育体制、職場文化、専門職共同体の在り方への静かな警鐘である。生活を守りながら研鑽を積める環境を整え、一人ひとりの成長を見守ってきたか。何より「ここに残りたい」と思える場を築いてきたか。

Belongingは、誰かが許可を与えて生まれるものではない。文化と、言葉と、日々の小さな積み重ねの中から、静かに、しかし確かに育っていく。広い北海道の各地で、多くの医師がそれぞれの場所を守っている。その一人ひとりが「ここにいてよい」「この共同体の一員だ」と感じられること。それこそが、これからの医療界を支える見えない基盤になる。医師会が、多様な医師たちにとって確かな「所属の場」であり続けることを、心から願っている。